

中学校の部

一期一会 ～その想いを紡ぐ～

静岡県・静岡サレジオ中学校 一年

高田 愛弓

プロローグ

一年前、私は海外で手術をするという、特殊な経験をした。学校の修学旅行でオーストラリアに行った際、飛行機内で腸閉塞になり、シドニーの小児総合病院で緊急手術を受けることになったからだ。

私には元々、腸閉塞の「持病」がある。四年生で虫垂炎と腹膜炎をこじらせてから、三ヶ月に一度程の割合で繰り返し起こるようになった。軽い時は二、三日の絶食後に腸の炎症が治れば退院、吐き続ければ開腹手術で二週間の入院を余儀なくされる。

一般的に、どんな病気であれ、開腹手術を受けたことがある人は誰でも、腸閉塞を起こすリスクを抱えるというが、一度もならない人もいれば、私のように繰り返すケースもある。この病の嫌なところは、「もう二度とならない」かもしれないが、「またなる」かもしれない、という予測不可能なところだ。更に起こってから命の危機までの猶予が短く、判断力と処理能力を問われる病だということも厄介な要因だ。だから、前日まで元気に登校していたのに、今朝になったら手術したという電話を学校にする、ということが何回かあって、先生方はとても驚かれ、その度に御心配をおかけしてしまう。

六年生でオーストラリアに行くことは、入学した時から決まっており、小学校生活のクライマックス的行事だったため、私は四年生で一回目の手術をした時から、

「オーストラリアには行けますか？」

と尋ね続けてきた。それから二年の間、入退院を繰り返しながらも、担当医の先生と話し合いをして、その度に、

「行けるようにしようね。」

と言われて頑張ってきたのだ。

私は、いつなるか分からない病気を恐れて人と同じ経験を諦めるのは嫌だった。人生の幅が狭くなってしまふ気がしたし、将来の可能性を自ら縮めているように思えて無性に腹が立ったからだ。一生海外へ行けないなんて嫌だ。グローバルな人間になるために必死で勉強しているのに、努力を棒に振る訳にはいかない。重い扉を開けて、私は自分の運命を切り開こうと思った。オーストラリアに行ければ、大きく前進できると思ったし、自分の身体に自信がつくと思っただけだ。

「万全の準備」を整えて出発したのに、「万一の場合」になってしまった修学旅行で、私は自分の身勝手さを感じずにはいられない程、多くの人に迷惑をかけてしまった。私の事情を全て分かっているが、行くことを承諾して下さった末吉弘治校長先生をはじめ、担任の青野雅子先生、六年A組のクラスメイトや引率の先生方、日本旅行の石川さんや増子さんなど多くの人が私一人のために全力を尽くして下さった姿に、申し訳ないと思う気持ちと感謝という、言葉ではいい表せない程の感動や愛情を頂いた。また現地で手術して下さったキャロライン医師やナースの皆さん、通訳の明子さんも、私の術後を懸命に支えて下さった。

私は異国の地で命を助けられたことで、「一期一会」について深く考えるようになった。日本にいても当然、素晴らしい「一期一会」は存在しているが、慌ただしい日常の中では感性が鈍くなりがちで、なかなか捉えることが難しい。ありふれた日常のファインダーがぼやけているのに対して、海外という非日常のそれは鮮明に被写体を捉え、印象的な一枚を撮ることができるのだらう。

ここでしか出会えなかった人たち。病気でなかったら来る筈のない場所。先生方との深い信頼関係や絆。ここで得た全てが私の中に息づいて、エネルギーになった。誰か一人でも欠けていたら、今の私はなかったかもしれない。一人一人に出会ったこと、その想いを紡ぐように瞬間ごとに心がシャッターを切ったことを、私は作文という形の「アルバム」に残そうと思う。

二〇一三年 十月二十四日

六年生は恒例の修学旅行に向けて旅立った。行き先はオーストラリアだ。ここに行き着くまでの六年間、少しずつ英語を学び、様々な準備を整えて、やっと出発する。小学校の修学旅行で海外へ行けるのは、我が校だけだという噂も手伝って、皆のテンションは最高潮だ。行く前からホールで写真を撮りまくってはしゃぐ人たちをよそに、私は自分の体調チェックに余念がなかった。

ほんの三週間前に、腸閉塞による癒着剥離手術を行ったばかりだからだ。掛かり付け医との相談の結果、現在、癒着を起こして曲がっている腸を手術によって剥離し、真っ直ぐにすることで、現地で再発予防をするためだ。これまで私は、自分が冷静な時に手術の同意をしたことはなかった。二度の開腹手術とも断れば死んでしまっていたからだ。健康不安を抱えたままのホームステイは厳しい。覚悟の三回目の開腹手術だった。

しかし、剥離手術の痛みは、単なる開腹手術の比にはならない程の壮絶なものだった。猛烈な眠気が襲ってくるのに、一瞬目を閉じただけで痛みで跳び起こされた。全身は冷や汗で冷え切っているのに、内側の触れない部分は烈火の如く焼け落ちるような熱く激しい痛みが終わることなく続いていく。痛さで気が狂いそうになり、耐え切れず嘔吐した。

私は他人事のように、こんなに痛くても人間って死ねないんだな、と思った。本当に痛い時は涙が出る余裕もないものか、とも思った。そして、薬が病の全てを楽にしてくれる物でないことを知る。

私がこの痛みと戦う間、母は何度も学校に足を運び、担任の青野先生に病状を報告したり、渡航するために行った手術であることへの理解を求めた。学校の答えはとても慎重なものであったが、医師の渡航証可書と英文の治療診断書を整え、粘り強くお願いした末、最終的に、校長先生と青野先生、両親との四者面談が行われた。常備薬のチェックから、万一に備えての綿密な話し合いだったそうだ。

成田に向かうバスに乗り込んだ私を、母は涙目で見送っていた。そんな母を確認した青野先生は車窓から力強い笑顔を覗かせ、「お預かりします。」とジェスチャー混じりに手を振った。

二〇一三年 十月三十日

八泊十日の修学旅行は殆どの行程を終え、私たちはメルボルンの飛行場に集合していた。周囲の心配をよそに、私は元気に日本に帰れることを心の底から嬉しく思っていた。母は現地の天候を毎日インターネットで確認し、お腹を冷やすなとくどくど言っていたが、大丈夫だったし、行くからには思いっきり楽しむように、という父との約束も果たした。私は満足でいっぱい。あとはここからシドニー空港まで行き、成田行きの飛行機に乗れば、明日には日本にいる。あの痛みを耐えた甲斐のあった体験や思いを、私はかみしめながら搭乗した。何となくお腹が張っている感じはあったが、さして気にも止めなかった。

離陸して暫くすると、事態は急変した。後に病院で聞いた話によると、高度が急速に上がる時に、人間の内臓は膨れるのだそうだ。私の場合も例外なく膨れ、そして先日の手術で新たにできた癒着部分に小腸の一部が引っかかり、機内で腸閉塞を発病させてしまったのだ。

腸閉塞には特有の痛みがある。おへその下がキーンとなり、その後はキュウキュウ締めつけられる痛みが変わっていく。私はすぐ、自分の身に何が起きたかを悟った。痛みはどんどん強くなり、やがて我慢できなくなって座席に小さくうずくまった。異変に気づいた周囲の友人が「大丈夫か」と声をかけてくれたり、近くに座る先生に知らせに行ったりしてくれたようだが、お礼も言えない程に状態は悪化していた。飛行時間は約一時間。機内には病人がいることを知らせるランプが点灯している。私はひたすら痛みを耐えた。

シドニー空港に到着した時、私は自力で歩くことができなかった。いちばん近くにいた原田先生に介助して頂きながら通路を進む。皆の歩く音だけが大きく聞こえ、やがて遠ざかる。

シドニー空港では、私たちを成田行きの乗り場まで案内してくださる、日本旅行の増子さん が待っていた。私のために車椅子を借り、場内のナースを捜す。校長先生と青野先生が私の容

体を確認し、日本の母に連絡を取った。

電話口の母の声に耐え切れず、涙があふれる。痛さは加速度を増し、上手く話すこともできない。日本へ帰りたいと訴える私に、母は、

「大丈夫だから、落ち着きなさい。暖かくしてゆっくり息をしてごらん。」

と言った。どんな時も母の言葉は魔法だ。少し痛みが軽くなったような気がした。

母は迅速に医師と連絡を取り、搭乗の可否を確認したが、医師の判断はノーだった。

メルボルンからの乗り継ぎのため、スーツケースだけが既に搭乗してしまっている。

場内のナースが私の状態を見て、カンタス航空のCAやパイロットと早口で話す傍ら、校長先生と母との電話のやり取りが続く。日本の医師同様、パイロットの判断も私を搭乗させる許可はできないというものだった。

私たちの目の前で、日本へのゲートが今、閉ざされた。

時刻は午後八時を回り、広い待ち合い室には校長先生と青野先生、増子さんと私の四人だけになった。こんなことは学校史上初だろう。私たちはそれぞれが呆然としながらも、次の行動を開始した。

増子さんは夜間の救急病院に電話をかけ、受け入れ先を捜し、校長先生はこの先私に起きるのであろう症状を母に聞き、青野先生は私を看病してくださった。

タクシーに乗り、病院までの道中、私の連続嘔吐が始まった。

私を受け入れてくれた病院は、シドニーホスピタルチルドレンという小児専門の総合病院で、シドニー内でもトップレベルの医師がいるところだった。増子さんが細かな手配をし、校長先生が流暢な英語で病状を説明する。私の痛みは怒りに変わり、体裁も繕わず「痛い、痛い」と叫んでは嘔吐を繰り返した。青野先生は、

「かわいそうに……。」

と言いながら、必死に看病し続けている。

私は苦しさに耐えながらも数々の検査を受け、そこで医師が

「operation」

と言ったのを聞き逃さなかった。そこにいる全員が驚きを隠せない程のショックを受けているのが手に取るようになった。しかし、私はやけに冷静にその事実を受け入れていた。自分の身体の話は、自分が一番知っている。私には、飛行機でうずくまった時から、こうなる予感があったのだ。だからこそ日本へ帰りたいかったし、日本で手術したかったのだ。誰もがショックなことは、ここが「海外」だということ、慎重で心配性な日本人ばかりだということだ。

二〇一三年 十月三十一日

日付けをとくにまたいでいたが、私の精密検査は続いていた。両親には校長先生からオペの承諾が欲しいとの一報が入り、両親は一刻も早いオペを望んだが、病院内規で医療通訳なしにオペすることは許されていなかったため、容易に物事が進まない状況があった。多国籍、多民族国家であるオーストラリアでは、無料で国の通訳サービスを受けられるシステムがあり、この病院にも例外なく専属スタッフが用意されていた。英語力に乏しい両親にとって、この方の存在は絶大だ。しかし、真夜中の緊急オペだということに、まさかの通訳待ちというタイムラグが生じるのは痛手だった。

午前二時を回った頃、漸く全ての準備が整い、そこから更に二時間の時差を越えた午前四時。日本の電話口に母が出る。同時通訳の国際電話一本で、娘の命を預ける同意をしなければならぬ。この時のことを母は、

「受話器を持つ手が汗だくで、滑り落ちそうになるのをもう片方の手で支え、耳の中まで汗をかいた。」

と後に語った。

執刀医もナースも、私の拙い英語を注意深く聞いてくれた。こんな時でも英単語が口から出ることに自分でも驚きながら、私は必死で説明した。医師たちも、私の解る英単語を選びながら、丁寧に処置の説明をしてくださった。国が違っても、両親がこの場になくても、百パー

セント意思の疎通ができなくても、これだけ多くの人に支えられていれば私は絶対助かるだろう、と直感的に思った。不思議と心細くはなかったし、二カ国語から同じ体温を感じた。そしていろいろな色の瞳から「大丈夫」を受け取って、私は手術台に乗った。

オペの成功が両親に伝えられたのは、日本時間の午前七時を過ぎた頃だった。オーストラリアにも朝がやって来る。

前日の昼から食事も取らず、不眠不休で私のために動いてくださった先生方にも安堵の色が表れた頃だろう。長い一日が終わったばかりなのに、新しい一日が始まろうとしている。私はまだ現実を完全にシャットアウトされた空間で、ただ存在している。

静寂を打ち破ったのは、どこか懐かしい、でもバイクのような音だった。私ははっきりしない頭の中で、父が既に到着して私の隣で寝ているのだと思った。ゆっくり目を開けると、ジャングルのような派手な模様のカーテンが私の周りを丸く囲っていて、ベッドから少し下の位置にある簡易ベッドで校長先生が眠っていた。元気があったなら、すっとんきょうな奇声を発したことだろう。しかし、深い眠りにつく校長先生を見て、すぐに申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

普段の校長先生は高そうなスーツに身を包み、背筋をしゃんと伸ばして校内を威風堂々歩いていらっしゃる。髪の毛一本一本も芝生の芽のように立ち上げられ、「前へならえ」でもしているかのように同じ方角に向かって揃えられている。このような一ミリの隙も与えない完璧な風貌が、特に悪さをしている訳でもない私を動揺させるのだ。すれ違うだけでびくびくしてしまう。

そんな校長先生が大いびきをかいて寝ているのだ。病院特有の雑多音の中で、自分の心臓の音だけが妙に身体に響いた。

校長先生のスーツはいくつも筋が入って、ヨレヨレになってしまっていた。先生の心身状態を示すかのような疲れ切った色をしているが、本来これは大勢の保護者の前で帰国報告するための逸品だった筈だ。急に悲しくなる。

病室の窓が少しだけ開いていて、先生の髪がフワフワ揺れていることに、私は気付いた。普段ならビルの谷間風にもびくともしないような髪は、なんと生まれたてのヒヨコを見ているような柔らかさで風と遊んでいる。この人の髪は赤ちゃんのような柔毛だったんだ!! 私は二度驚いた。見たことのない、見る筈もない無防備な校長先生を見てしまったような気がした。罪悪感にも似た気持ちがしたが、同時に親近感を覚えた。その時だった。点滴を終えるブザーが私の頭上で鳴り響き、校長先生がガバッと起き上がった。

「ど…どうしましたか? 大丈夫か?!」

私は自分の考えていることが後ろめたかったので、思わず、「あ…青野先生は、どこですか?」と、何ともまぬけな質問をしていた。

宮沢賢治は『マリヴロンと少女』の中で、「正しく清くはたらくひとは、ひとつの大きな芸術を時間のうしろにつくるのです。」と書いている。私は三人の大人の中に、それを見たような気がした。三人とも仕事の枠をはるかに越え、自分の責任を全うしてくださった。増子さんに至っては、空港での乗り継ぎ案内のみの仕事だった筈なのに、徹夜になってしまった。何事もなければ、顔も名前も印象に残らないまま、大量の思い出の波に出会ったこととともに流されていただろう。その人が私の命のために、ここまで奔走してくれたのだ。お客様をお見送りするという仕事の責任を彼は最後まで果たした。

青野先生は担当の六年A組の生徒を他の先生に託してまで、私の看病を優先してくださった。五年生で私の担任になった時から、二年間入退院を繰り返す私の病を誰よりも理解し、そのことを活かして全力で看病をしてくださった。渡航を心配し、現地で毎日体調を気にかけて、手術の時は手術室まで一緒に入り、私が麻酔を吸うまで寄り添ってくださった。日本では考えられないことだが、両親以上のことを先生はやったのけたのだ。母に力強い笑顔を見せていたのは本物だった。心から尊敬できる恩師の一人に、先生はなった。

校長先生は私のことだけでなく、青野先生や増子さんのことにも心を砕いた。学校という世

にも重い鞆を常に背負い、両親にも納得してもらえるように、密に連絡を入れていた。先生の御心労は優秀なリーダーが抱えるそのものなのだろうと、私は思う。

お金を得るために仕事は存在するが、それ以上に人間力を磨いているのではないだろうか。人は人間力を磨くために、仕事を与えられているのかもしれない。

二〇一三年 十一月一日

両親がシドニーに到着したのは、翌日の昼近くだった。私の中では随分長く感じられたが、母が持っている鞆が、近所のスーパーへ出かける時の物と同じだったことから、相当急いで日本を出発して来たのが分かった。スカートこそはいているが、顔じゅうクマだらけで、めっきりやつれている。母は私を見るなり抱きついて、

「大変だったね。頑張ったね。そばにいてあげられなくて、ごめんね……。」

と言うと、青野先生の方を向いて

「先生、ごめんなさい……。」

と、堪えていた涙をポロポロ流したまま、先生の肩に顔をくっつけて泣いた。先生は母の腕をしっかり支えて、

「私の方こそ、一緒に連れて帰れなくてごめんなさい……。」

と声を震わせた。

私はこんな母も先生も、見たことがなかった。それぞれの立場でお互いのことを思い合い、互いに自分の腑甲斐無さを責めていた。ここまでに積み重ねて来た様々な想いが、涙に変わっていくのを私は胸の奥がずしんとなりながら見守っていた。

キャロライン先生が改めて両親に病状を説明した時、校長先生と青野先生は立ち会った。ここまでが「責任」だからだ。

術後の痛み止めにモルヒネを投与していると知った母は、そのイメージから、

「日本人の体質に強すぎるということはないのでしょうか？」

と質問したところ、

「この病院には、世界中の子どもが入院している。勿論、日本の子どもたちも沢山治療してきたわ。どの子にも何の問題ありませんから心配いりませんよ。」

と答えられ、とっさに自分を恥じた、と言った。帰国後、主治医に確認したところ、日本でも手術中は頻繁に使っているし、そんなに危険なものではないという回答が返って来た。日本では手術中に何の痛み止めを使用しているかなど聞く余地はなかったから、知識として、モルヒネは末期ガンの痛み止めという決めつけしかなかったのだ。母が強い薬と感じたのも無理はないと思った。

オーストラリアは人種のるつぼであり、全ての人間は共通の治療法で治す。全ての人間は平等であると言われているような気がした。

私は痛みを完全にコントロールされ、日本とは比べ物にならないほど楽に過ごすことができたが、全てにおいてカルチャーショックを受けていた。

オーストラリアは九六年から〇七年まで十年連続で国の連邦予算が黒字であった。〇八年以降は世界的な金融危機の影響でオーストラリア経済も減速し、一三年まで財政赤字だと増子さんが教えてくださった。そんな中で、社会保障や福祉、保険、医療に大きな割合を割り、教育を加えると全体予算の五〇パーセント以上に達するという話もしてくださった。医療は日本よりはるかに進んでおり、私が日本で一か月前に受けたオペは、随分古いやり方だと医師から聞かされたことも、落ち込む原因になった。

私は日本の医療に誇りを持っていたし、小児総合病院では日本一とうたわれる、静岡県立子ども病院で手術したのだ。全国各地から最新の技術を求めて難病患者が集まってくる最高峰でさえ、この国では霞んでしまう。

つい先日、「国境なき医師団」という大きなポスターを街で見かけた時、「格好いいな」と思った。紛争地域や途上で活躍する日本人を想像し、キラキラした思いがした。そして今、私はオーストラリアの地で国境を意識しない医師により最新治療を施されている。

地球は広く、私は無知で、思考は限りなく狭かったことを思い知った。

財政予算が行き届いていると身をもって感じたのは母も同じようだった。シドニーホスピタルチルドレンは、私営ではない。にもかかわらず、付き添いのために果物やパンなどの軽食、温かい飲み物が常備されており、好きな時に無料で飲み食いができたり、ランドリーも自由に使えたりと、泊まり込む側へのサービスが充実していることにしきりと感心していた。

先日読んだ新聞によると、日本の医療費は四十兆円で、その内七十五歳以上の一人当たりの平均医療費は約九十二万円だそうだ。このまま高齢化が進み、長寿になればなる程、入院や手術が増し、下手をすれば病人自身にも手が回らない状態になりかねない。そんな現実において、付き添う側への配慮など、もはや不可能に近いと私は思った。しかし、日本より医療が進むオーストラリアにおいても高齢化現象は起きているし、医療スタッフが不足するといったことも起きている中、何故このようにサービスが行き届いているのか。日本が学ぶべきことが、ここにもあるような気がしてならない。

快適な入院生活になるだろうと思った私は、母がいつもより無口なことに気が付いた。私たちの間では良く喋ったが、ナースの前ではひたすら困惑していたのだ。英語が話せない母は完全アウェーなこの土地で、突然暮らさなければならなくなってしまったのだ。父も英語が話せないが、仕事のためすぐ帰国するので、こちらは問題ない。母が英語圏で挙動不審になったのを見かねて、父は増子さんに通訳の手配をお願いした。

校長先生と青野先生は、その夜の便で日本に帰国した。暦の上では連休中だったので、少なくとも六Aの友人たちにこれ以上の迷惑をかけずに済んで、私はホッとした。先生方の疲労はピークに達しているだろう。

しかし私は、先生方がいたからこそ、海外での手術を乗り越えることができた。そして、学校で見る先生方はほんの一面しかないけれど、私たち生徒のことを心から愛し、思いを寄せてくださっていることを知った。先生は勉強や人としての生き方を教えてくださること以外に、もっと大きな眼や心で生徒を預かっていることに、私はとても感銘を受けた。

二〇一三年 十一月二日～十日

母が来て目一杯我がままになった私は、どうしても日本へ帰りたくて八つ当たりをしている最中だった。

「おはようございます。通訳のメイコです。明るい子と書いて『メイコ』よ？ 珍しいでしょ？ よろしくお願ひします。」

何事も見なかったように接するあたりが大人だ。私はすぐ自分を取り戻した。

明子さんは名前負けしない、とても明るくお喋りの好きな方だった。一日中病室にいるというのに、観光地案内をしているかのように話していることが多かった。明子さんがいてくれたおかげで、母はナースに要望を言いやすくなり、質問したり、必要な物を的確に頼めるようになった。この病院のナースは誰もがホスピタル・クラウンのように面白い。スキップしながら体温を測りに来たり、やたらとアイスクャンディを勧めたりする。しかし、ただ陽気なだけでなく、心配したり、なぐさめたりもする。母が英語が話せないと分かったら、電子辞書で英語を打ち込み、日本語に訳してコミュニケーションをとろうとしたり、自分の知っている日本語を連発しながら見回りに来ることもあった。夜の十時過ぎに「sushi」、「sushi!!」と鼻歌混じりにやって来る人もいて、私たちは存分に笑った。

明子さんが五日で退院するらしきことをドクターから聞いたのは、二日目の夜だった。開腹手術の場合、日本では二週間は入院する。ちゃんと食事が食べられ、しっかり消化物が腸を通過すれば問題なし。それ以上の経過を病院で見る必要性はないというのが理論らしかった。その証拠に、オペの二日後にはアイスクャンディが出て、三日目の朝、乳製品が出たのを最後に、昼から通常食になった。日本ならば絶食状態で、やっと飲料水の許可がおりの頃だ。私たち母子は目を白黒させてしまった。中でも最も驚いたのは、食事時になると、多目的スペースがバイキング・ビュフェになり、好きな物を好きなだけ食べればよいということだった。だから、足を骨折した超太めのお兄さんが、フライドポテトとハンバーグのみを皿から飛び出すほど山

盛りにして、意気揚々と病室に戻る姿などとも遭遇し、こちらの気が滅入ることがあった。腸の病だというのに、がっつり油の肉食系か、ゴロゴロ野菜の選択肢のみというのは辛かった。お粥が食べたかった。

同室のお姉さんは、夜中にナースコールを押してカップ麺を渡していた。食事時間も自由なのだ。入院中の栄養バランスはどうなってしまうのだろう、と私は心配になった。しかし、そんなことを心配する前に、皆退院してしまうのだ。肝心なところだけしっかりできれば、後の細かいことは自由だ、という概念に困惑しながら、私は少しずつ順応していった。

日中、読書などをする暇はない。それぞれの年齢や性別に合わせて、ボランティアの方々がイベント紹介にやって来る。私はカラフルな安全ピンを繋いでブレスレットを作ったり、折り紙をいくつか合わせて模様を作る体験などを楽しんだ。病室から少し離れた場所にはゲームセンターがあり、宇宙服のようなコスチュームに水色のラメの入ったナースキャップを被った「DJナース」が常在して、ノリノリで踊っていた。大スクリーンで映画を観たり、マリオに夢中になっている子がいたりする壁際では、幼い子供たちがペインティングをして遊んでいる。パジャマ姿であることを除けば、ここは無料のショッピングモールだ。このようなシステムの中、私は方々歩かされ、五日目にはほとんど普通に歩けるようになっていた。

退院の日、キャロライン先生に、
「愛弓は日に日に良くなっているのに、ちっとも嬉しそうじゃない。もっと笑って。」
と言われた。私は心配させてしまったことに気付き、無理矢理口角の周りにしわを作り、
「嬉しいです。ありがとうございました。」
と言って、深々とおじぎした。

確かに私の心は晴ればれとしていなかった。病院を五日という驚愕のスピードで退院しても、術後十日間は飛行機に乗れないのだ。その期間を過ぎても、医師の許可書がないと搭乗できない。少なくとも、JALの規約はそう決まっていた。一刻も早く帰国したい気持ちと、飛行機に乗る恐怖が胸の中で交錯する。

この五日間の目まぐるしいカルチャーショックに疲れを感じていたし、一ヵ月前の死ぬほど苦しんだオペへの空しさも感じていた。身心ともに受難を乗り越えることの限界に達していたのかもしれない。私は滅多なことではくじけないが、この時初めて「頑張れないかもしれない」と思った。病院を出る時、涙が零れた。

残り五日のホテル生活も、明子さんが支えてくれた。日本食の店を紹介してもらおうと、母はレトルトのお粥を大量に買い込み、部屋のポットに入れて「調理」した。他にも消化に良さそうな物や果物を中心に購入し、私に合いそうなものを見つけていった。海外のホテルに一人置いておくのを不安に思った母は、買い物度に私を連れ歩いた。私は日本での入院生活の甘さを実感しながら、生きるために必死で歩いた。シドニーは十一月だというのに、ダウンコートが手放せないほど寒い日もあれば、ノースリーブでも暑いほど汗をかく日もあって、体調管理が大変だった。

明子さんは私たち親子が少しでも笑顔になれるように、様々なことを提案したり、母に毎日ビタミン剤を飲むよう薦めてくださった。何日かともに食事をし、私のこれまでの経緯に涙し、私の一週間を支えてくださった。明子さんの性格が祖母に少し似ていたので、私は明子さんのことが好きだった。

帰国日の朝は五時起きだった。明子さんは私をぎゅっと抱きしめ、
「元気な時に、またおいで。」

と言って、硬く手を握った。もはや親戚の叔母さんに別れを告げるような気分だった。

増子さんは旅行会社の人らしい対応で礼儀正しく挨拶すると、子どものように大きく手を振って見送ってくださった。真っ白な壁のカーブをくぐった時、私は増子さんたちとの時空の繋がりが、ふっと途絶えたような気がした。

免税店がひしめく通路を歩くと、あつという間に人混みに紛れてしまった。本当にさよならだ、と私は思った。

JALのCAさんが私をしっかりマークする視線をひしひしと感じながら、私は十日前くぐれなかったゲートに足を踏み入れた。

果てしなく長かった修学旅行が、やっと終わりを告げた。

エピローグ

日本はすっかり秋だ。さらさらした風が肌をひんやりさせる。私の帰国を胸がはりさけそうな想いで待っていた祖母は、私を見つめたまま暫く言葉に詰まっている。そして思い出したように、

「お帰りなさい……。」

と言うと、ガラス細工を触るかのように、そっと抱きしめて泣いた。祖父や叔母たちも同じような顔をしていた。いつも私に何かあると、車で一時間以上かかる道のりを急いで飛んでくる祖母が、今回海外で手助けできなかった分、気をもんでいたのがよく分かった。

私はとりとめもなく溢れ出す愛情の中に、自分がいることを感じて、温かく満たされていくのを確認した。

海外で病気になったことは、紛れもなく不運な出来事だったが、そこで受けた多くの優しさや思い入れの方が不運に勝っていることに私は気づいた。大変なことは色々あったけれど、その都度それをカバーできるだけの沢山の「ハート」に支えられていたことを実感した。それは私の見えなかったところでも、大勢の人が私を想い、心配して、祈り続けてくれた気持ちの大きさや愛情の深さが、病気に対する不安や痛みを吸い取ってくれたからだと思う。私は自分が考えている以上に、知らないところで人に想われていることに感動した。

校長先生は、帰国してからも増子さんと頻りにメールでのやり取りをして、私の病後のことを把握してくださっていた。校長先生は普段は直接生徒と関わることがないから、生徒一人一人のことを詳しく知っていることなどないだろうと思っていた。しかし、今回のことで、私だけでなく、他の生徒のこともともしっかり把握なさって、考えたり想ったりされていることを知った。小・中・高の膨大な生徒らの情報や成長過程を、先生は把握し、見守ってくださっている。

私は決して「先生っ子」ではないから、聞かれない限り、自分のことは話す方ではなかった。しかし、術後に青野先生とのんびり世間話をするうちに、先生が驚く程皆のことを知っていたり、想っていることを知り、私はとても感慨深い思いがした。私のことも、私が思う以上に理解してくださっていたし、もしこのまま成田行きの飛行機に乗っていたら、腸が破裂した可能性もあったと医師から聞かされた時は、

「本当に乗らなくて良かった。乗らなくて良かったね……。」

と何度も言っていた姿が母と重なりさえした。

私たちは先生のこうしたコアな部分をあまり知らないけれど、先生が日頃おっしゃる言葉の奥には、沢山の様々な想いが詰まっていたことが分かって、「先生」と呼ばれる方への見方が変わった。「先生」は心から信頼し、感謝できる大人だと思う。そう思える先生方に出会えて私はとても幸せだ。

両親には、入退院を繰り返す度に悲しませて辛い気持ちになる。しかし、常に病に対して前向きであることが、私の心を支えてくれる。私の気持ちが折れそうな時も叱咤激励してくれたり、わんわん泣かせてくれたりして、全てを受け入れてくれる。この場所があるから私は私でいられるのだと思う。口論したり、反抗することもあるが、私はこの両親のもとに生まれて、本当に良かったと思う。

「愛弓」という名前には「愛のキューピッド」という意味が込められているのだそう。これは恋愛に限らず、人と人とのかけ橋のような人間になってほしいと願ったところから付けられたと聞いた。私は生きている限り、私が受けた恩恵を誰かのために繋げるように、人の役に立ち続ける人生を送っていきたい。そして私が発動したことで、多くの人が幸せになれるようなサプライズを沢山作っていきたい。

私は人との出会いはパズルに似ていると思っている。一人一人はパズルのピースで、様々な色彩や形をして、世界中バラバラな所に点在している。しかし、一つの目的のために一度集結されると、息の飲むような作品を創り出す。一つの作品が完成すると、決してそこに留まらず、またバラバラに散っていき、次の作品のためにどこかの一部となつてはめられていく。「自分」

にしか当てはまらない場所で、誰かや何かの一部になることで生かされている。人生はその繰り返しのような気がするからだ。そして亡くなるまでの道のりにおいて、何枚もの「完成品」を残していくのだと思う。

言語や宗教が違って素晴らしいパズルが完成するのは、個々間に国境が存在しないからだ。利益や欲望が国境という見えない巨壁を作っているにすぎない。私は、地球上の限られた全ての財産が国境から解き放たれ、争いのない世の中が訪れることを切に願ってほしいと思う。

人は健康な時ほど、生きることに無関心だ。健康であることが当然のように、変わらない明日が来ると思っている。しかし、生きている以上、死とは常に隣り合わせだ。成長することとは老いるということだし、一日生きれば、一日死に近づいている。だから、生きることにもっと懸命に、もっと貪欲になるべきだ。いつか必ず死んでしまうことを念頭に、その儚さを慈しみながら全力を尽くすよう、私は生きてほしいと思う。ただぼんやりと人と出会うのではなく、お互いの人生に影響を与えながら、進化し続けたい。現在の私が出会っている人に対して、どんな意味があるかを考えながら、一分一秒を有意義に生きていきたい。

シドニーで最高なドクターに出会ってから一年、私は一度も再発していない。この必然の出会いを、神に感謝せずにはいられない。

(指導：村田宏教諭)